

東京都高校総体本大会に期待する選手 〈男子編〉

今大会を開催するに当たり、大会本部より今回の東日本大震災により被災されました多くの方々に心よりお見舞いを申し上げます。また、震災以来今日まで部活動の自粛や制限、競技会の中止などの困難がございましたが、無事に今大会が開催されますことはひとえに関係者各位のご協力の賜物と感謝申し上げます。

今大会の選手たちのはつらつとした競技に絶大なるご声援を賜ればとお願い申し上げます。
ここに、昨年度の記録と支部予選大会の結果から活躍が期待される選手たちをご紹介します。

1.トラック

短距離・今年男子短距離をリードしていくのはケンブリッジ飛鳥（東京3）であろう。ケンブリッジは昨年の関東新人で100m・200mに優勝しており、ともに10秒75・21秒46の好記録を保持している。特に後半の伸びは素晴らしく、どちらかといえば200mで全国上位入賞候補といえるだろう。ケンブリッジに続くのは、100mでは10秒82の時光 龍一（立正3）、同じく10秒8台の記録を持つ松島 直・藤 直也の学習院コンビ、100m・200mとも成長著しい金戸 正太郎（保善3）徳岡 隆之介（八王子2）松本 裕也（岩倉2）猶木 雅文（東京3）立川 義隆（都上水3）である。新しく改装されたブルーの駒沢競技場のトラックを最も早く駆け抜けるのは誰になるのだろうか？目が離せないところではあるが、100mでは10秒8台、200mでは21秒台が入賞には求められる記録ではないだろうか？

400mでは昨年度48秒台をマークした太田 晃平（早稲田実3）三武 潤（城西2）がリードしている。これにスピードに優れている徳岡や、伸びやかな走りを武器に200m・400mに転向してきた小林 将一（保善3）が競り合う形でレースは展開されると思われる。優勝者には47秒前半を、入賞者には48秒台をマークしてほしい。

中長距離・800mでは、昨年1年生ながら沖縄インターハイ4位・千葉国体2位の三武 潤が記録的にも1分52秒台の全国2位のランキングで全国制覇を目標としている。400mのスピードが確実にアップしておりレース展開次第では1分50秒台も期待できそうだ。3月の全国高校合宿でも研鑽を積み、順調に成長しているのが確認できる。三武と競り合えるのは1分53秒台を持つ田中 言（早稲田実3）だろう。スピードもあり、なおかつ今年は1500mにも成長がみられる。元来レース巧者でもあるだけにいかなる展開にも対応できる能力も備えている。今年はこれまで1分55秒台までに白石 浩之（立教池袋2）出口 翔（開成3）など複数の有力選手がおり混戦が予想される。全国決勝レベルのタイムとなるよう積極的なレースを期待したい。

1500mは自己記録だけを見れば3分51秒66の打越 雄允（久我山2）の独壇場である。この記録は高校1年生歴代3位であり、昨年の千葉国体少年B3000mでも優勝している実力から、アクシデントのないかぎり優位は不動だろう。勝敗よりも東京都高校記録の更新を期待したい。打越以外に昨年4分を切った選手は藤岡 孝彰（早稲田実3）菊池 聡之（岩倉2）とおり、新入生の岡田 佳之（早稲田実1）は昨年の全国中学ランキングトップ4分00秒94の記録をもち有望だ。今年の5000mは東京都大会史上最強となりそうだ。打越を中心に見廣 雄一（拓大一3）我那覇 和真（東京実3）と14分20秒台の自己記録を持つ3名がおり、今冬の駅伝で成長著しい武田 凜太郎（早稲田実2）中村 克磨（拓大一3）も力が劣ることもない。13分台を目指すとともに14分前半での入賞争いを期待したい。昨年度の記録を見ると14分台の選手が24名もおり着実にレベルアップされている。これもひとえに指導者の先生方の熱意の賜物と感服する次第である。

3000mSCでは、9分27秒97の記録を持つ高木 登志夫（都南多摩3）を軸に、成沢 孝星・島田 征哉の都若葉総合コンビと宮下 紘一（駒大高3）らが集団を形成しそうだ。この種目を専門種目とする選手が見当たらず、かつ経験不足が否めないのが現状だが、潜在能力を有する選手はいるので積極的なレースをして9分10秒台をマークする選手が出ることを期待したい。

競歩・期待が持てるのは、22分21秒18の記録を持つ星谷 健（東京実3）だろう。21分台前半が全国トップクラスだけにそこを目指したい。東京実業はこの種目に伝統があり、洪 肇佑（3年）22分49秒99、風間 渉（2年）23分40秒43と両名とも昨年から1分以上記録を短縮しており成長著しい。上位独占は歩型を崩さない限り間違いないだろう。

ハードル・110mHでは昨年同様大変な激戦が予想される。中心となるのは昨年の沖縄インターハイ7位入賞の高畠 匠（東京3）で今年全国優勝候補の一人でもあるが、チームメイトの白田 耕平（東京3）や飯島 雅人（都駒場3）、城倉 壮志（日大豊山3）らがともに全国ランキング上位だけにだれが勝つかわからない。混戦の中で自分のリズムを保てた者が最上位となろう。また、昨年のジュニアオリンピック優勝の新入生・坂本 景（東京1）や渡辺 翔（保善3）にも全国出場の可能性があり楽しみな種目である。

400mHでは昨年1年生ながらインターハイに出場し、日本ユースで53秒07の高校1年生歴代3位をマークした田辺 将大良（東京2）が筆頭である。しかし、4月に入ってから鎖骨を骨折し手術するというアクシデントにあっているだけに出場できるかが問題だ。松本 建志（中大附3）高久 利樹（都足立新田3）に優勝のチャンスが訪れる可能性も大である。

リレー・・・4×100mリレーでは東京が一步リードしているといつてよいだろう。昨年インターハイで5位となった実績を考えれば今年は全国優勝を目指したい。4月10日に41秒30をマークしているだけに優位といえる。これに、保善が41秒87をマークし大きな飛躍を遂げている。また、八王子は層も厚くなり、学習院・岩倉とともに全国を目指していい存在だ。

4×400mリレーでは「ずば抜けた」学校はなく混戦だ。都新人でも激戦だった通り、都文京・東京・早稲田実業・八王子が激戦を繰り広げそう。個人種目との兼ね合いがチーム力を左右するかも知れないが、激戦の南関東を勝ち抜くには3分15秒台の力がなければインターハイ出場も厳しく思える。

2. フィールド

跳躍・・・走高跳では小林 亮（八王子3）がシーズン早々から2m02の自己記録を跳び一步リードしている。高い潜在能力を備えているので全国レベルの大会で実力を発揮してもらいたい選手だ。小林に続く2mジャンパーは見当たらないが、瀬戸 新二郎（城東3）千葉 智也（専大附3）先崎 航（都つばさ総合2）などにそのチャンスがありそう。

棒高跳は昨年、新人大会出場が2名だった事実を見つめなければならない。その中で大石 悠（明中八王子3）が4m20の自己記録を持っていてリードしている。しかし、今年新加盟した日本ウエルネスの船本 稜矢（3年）が4m60の記録を持ち、新入生で昨年4m10を跳んだ渡辺 淳之（都比谷1）が参戦し、全体の出場選手数も11名となり、俄然にぎわってきそう。

走幅跳は、支部予選で唯一7mを超えた佐藤 耕太（都片倉3）が「俄然リード」といってよいだろう。昨年の新人大会では7mを超える選手がいなかっただけに成長がうかがえる。ただ、今年は新入生に有望株がいる。昨年の全日中2位とし、7m04の中学ランキング1位の内川 佳祐が長野県から東京高校へ進学をした。また、昨年東京都を代表して千葉県国体に出場した前田 隼（早稲田実1）、昨年よりさらに力をつけ支部予選で6m71を記録した小路 直輝（本郷1）と2年後の「東京国体」へつなげるような布陣となりそう。

三段跳は昨年の関東新人で優勝し14m32の記録を持つ菊池 真生（都西3）が実力的には優位である。支部予選ではまだ本調子とは言えない様子。同じく昨年14mを超えている西山 時生（岩倉3）重田 泰宏（都市大附3）楠 康晴（日大桜丘3）も支部予選では力を発揮していないようだ。こうなると、支部予選で調子を上げてきている者にもチャンスが出てくるかもしれない。

投擲・・・砲丸投では、昨年15m93をマークし全国ランキングも上位となる鈴木 愛勇（東京3）に大会新記録の期待がかかる。インターハイでも優勝を争うチャンスがあるだけに16mの大会を記録してもらいたい。同じ東京高校の大山 優太（3）幸田 和記（2）、そして、佐藤 光一（都松が谷3）が15mオーバーに挑むことになりそう。

円盤投は今年レベルが高い。昨年の都新人大会の6位入賞全員が40mを超えており全国一の活況を呈している。大山が全国ユース選手権で優勝し、東京都高校記録の46m27をマークしているだけに優位であるが、44m57の細川 健二（堀越3）43m台の幸田、堀内 隆仁（学芸大附3）にも十分チャンスがある。是非とも新人大会を上回る好記録をみんなでマークしてほしい。ハンマー投は昨年60mを超え東京都新記録を3名もの選手が樹立するハイレベルであったが、彼らが抜けて昨年の新人大会で唯一50mを超えた若月 優士（都北多摩3）が53m48と孤軍奮闘している。ハンマー投げは一足早く5月8日（日曜日）大井競技場で本大会を開催した。結果参照。

やり投はここ数年60mを超える選手が毎年誕生したが、今年はどうだろう？ 支部予選が今季初戦という選手が多かったので記録的には今一つの状態だ。その中、勝田 悠平（日体荏原3）の55m62がトップであり優勝候補の一番手であることに間違いはない。昨年の記録からは中嶋 健人（立教池袋3）中村 匡（都江戸川3）板橋 悠人（穎明館2）が有力視出来る。

3. 混成競技

八種競技では、昨年4646点をマークしている栗原 彰理（都東大和2）に期待したい。得意の走高跳・ハードルでアドバンテージをとり、苦手種目の投擲を攻略すれば5000点が見えてこよう。昨年同校の先輩木村 鷹選手が4700点台から5200点まで伸ばしインターハイへ出場しているだけに、今年も続きたいところだ。

4. 総合

やはり今年も東京高校が総合優勝最有力だろう。短距離・ハードル・投擲に全国優勝候補がおり、リレーでの加点も期待できるだけに全国総合優勝も視野に入れたいところだ。保善・八王子・東京実業が総合で上位に加わりそうな布陣である。

＊南関東大会・・・6月17日～20日まで、千葉市スポーツセンターで行われる。

＊インターハイ・・・8月3日～7日まで、岩手県北上市で行われる。「がんばろう！東北！！」